勝軍地蔵附地蔵菩薩像頭部納入品仏画等

【所 在 地】垂水市高城字地蔵の下2535番地

【種別】県指定有形文化財(彫刻)

【指定年月日】平成14年4月23日

垂水市高城の「勝軍地蔵」は、昭和28年に県文化財に指定された。木造地蔵菩薩立像に木造毘沙門天像と木造多聞天像が両脇に従って三尊のような安置となっていて、この3躯を総称しての名称である。大正末年の解体修理の際に体内にたくさんの墨書銘が知られ、地蔵尊が永正3年(1506)の10月に、潤11月に両天部像が造立されたことが判明した。

昭和54~55年度に京都・美術院において本格的に解体修理され,その時初めて,木造地蔵菩薩立像の頭部が矧ぎ目から開けられ,納入品の和紙の束が発見され取り出された。それは手書きの白描図像を主体とする奉籠品であった。主なものは20尊を十三仏風に縦3列に描いたマンダラ風のもので,ほぼ完好なもの39枚が裏打ちされて保管されている。その20尊仏画マンダラの右下最下段に



描かれた不動尊の岩座に「快扶」のサインがあり、「勝軍地蔵」の作者でもある快扶の書写によるものであることが分かり、木彫の仏師が描いた達者な図像に驚かされる。もう一つの仏画は印仏を押すように手書きの白描図像を並置して描いたもので、前者と同巧の図像であり筆者は快扶と思われ、いずれも見事な筆さばきの白描図像である。

通常このような図像を納入の場合,鏤刻し押印あるいは墨刷りした"印仏"や"摺仏"が用いられるが, ここでは手書きの図像を用いている。中世の貴重な絵画作品であるばかりではなく,中世後半期の地方にお ける仏像造顕と奉籠物,或いは仏師たちのあり方を示す稀に見る貴重な資料である。

また、白描図像のほかには、中世の梵字陀羅尼経の残巻や寺堂・仏像及び人物等の図もみられる。後者の建物や尊像図、人物群像などの絵画は造像当初の納入と考えられるが、元禄頃の修理彩色時の状況も気がかりである。つたない描写ではあるが、寺堂に仏・菩薩や不動明王像などが安置され、人々の動きには縁日か祭りの賑わいが思い起こされる。童画風の描法と構図ではあるが、まじめに何かを伝えようとする不思議な雰囲気が伝わってくる。描かれた時期の究明もさることながら、地蔵尊の頭部に奉籠という特異な存在を念頭に、絵説きを試み、読み解くべき貴重な資料といえる。